

第17回 平成30年度 遺跡調査報告会

2018年11月10日 土 午後2:00～4:00

展示・報告遺跡

- ◆ ^{いかずち}雷遺跡 (八戸市中居林 古代・近世) 横山 寛剛
- ◆ ^{くしひき}櫛引遺跡 (八戸市櫛引 中世・近世) 苧坪 祐樹
- ◆ ^{にいだじょうあと}新田城跡 (八戸市新井田 中世・近世) 田中 美穂

【特別報告】

- ◆ ^{さんのへじょうあと}三戸城跡 (三戸町梅内 中世・近世) 野田 尚志

展示 遺跡

- ◆ ^{はちのへじょうあと}八戸城跡 (八戸市内丸 弥生時代)



調査区全体の写真(櫛引遺跡)



現地説明会の様子(新田城跡)



八戸市埋蔵文化財センター
是川縄文館

〒031-0023 青森県八戸市是川字横山1
TEL 0178-38-9511 FAX 0178-96-5392
<http://korekawa-jomon.jp/>

◆会場：是川縄文館 体験交流室

◆主催：八戸市埋蔵文化財センター—是川縄文館

平成 30 年度発掘調査遺跡一覧

No	遺跡名	時代/種類	所在地	調査原因	調査面積	調査期間
1	八戸城跡①	縄文・弥生・古墳・近世・近代 /城館跡	内丸	店舗建築	3.00㎡	平成 30 年 4 月 9 日
2	石橋遺跡(10 地点)	平安/集落跡	大字新井田	個人住宅建築	32.50㎡	平成 30 年 4 月 9・10 日
3	舟渡ノ上遺跡①	縄文/散布地	大字鮫町	個人住宅建築	63.00㎡	平成 30 年 4 月 10～18 日
4	雷遺跡(4 地点)	縄文・平安/散布地	大字中居林	集合住宅建築	130.50㎡	平成 30 年 4 月 11・12 日
5	市子林遺跡(23 地点)	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世 /集落跡	大字新井田	長芋作付け	809.00㎡	平成 30 年 4 月 13～19 日
6	前川目遺跡①	縄文/散布地	大字金浜	個人住宅建築	27.70㎡	平成 30 年 4 月 19 日
7	石橋遺跡(11 地点)	平安/集落跡	大字新井田	長芋作付け	126.50㎡	平成 30 年 4 月 20・23 日
8	八戸城跡②	縄文・弥生・古墳・近世・近代 /城館跡	内丸	集合住宅建築	79.50㎡	平成 30 年 4 月 24～27 日
9	雷遺跡第 7 地点	縄文・平安/散布地	大字田向	個人住宅建築	39.00㎡	平成 30 年 4 月 27 日 ～5 月 1 日
10	浜道通遺跡	縄文/散布地	大字鮫町	農業用倉庫建替	13.50㎡	平成 30 年 5 月 8 日
11	古馬屋遺跡	縄文/散布地	大字鮫町	太陽光発電設備設置	90.00㎡	平成 30 年 5 月 28 ～31 日
12	殿見遺跡	縄文・奈良・平安/散布地・古墳	大字八幡	個人住宅建築	2.50㎡	平成 30 年 6 月 5 日
13	土橋遺跡隣接地	縄文/散布地	大字榊引	範囲確認	25.50㎡	平成 30 年 6 月 5 日
14	田面木遺跡①	縄文・弥生・奈良・平安/集落跡	大字田面木	個人住宅建築	1.25㎡	平成 30 年 6 月 6 日
15	高館遺跡	縄文・平安/散布地	大字河原木	個人住宅建築	1.00㎡	平成 30 年 6 月 13 日
16	雷遺跡①	縄文・平安/散布地	大字田向	個人住宅建築	3.20㎡	平成 30 年 6 月 14 日
17	松ヶ崎遺跡(11 地点)	縄文・奈良・平安/集落跡・貝塚	大字十日市	長芋作付け	409.60㎡	平成 30 年 6 月 14 日 ～7 月 4 日
18	松長根遺跡	縄文/散布地	大字田面木	個人住宅建築	15.00㎡	平成 30 年 6 月 19 日
19	八戸城跡(40 地点)	縄文・弥生・古墳・近世・近代 /城館跡	内丸	店舗建築	79.03㎡	平成 30 年 6 月 21～28 日
20	酒美平遺跡①	縄文・飛鳥・奈良・平安/集落跡	大字田面木	太陽光発電設備設置	48.50㎡	平成 30 年 7 月 9～11 日
21	田面木遺跡②	縄文・弥生・奈良・平安/集落跡	大字田面木	個人住宅建築	7.00㎡	平成 30 年 8 月 9 日
22	八戸城跡(41 地点)	縄文・弥生・古墳・近世・近代 /城館跡	内丸	交番移転築	36.00㎡	平成 30 年 8 月 17 ～28 日
23	天狗沢遺跡	縄文・平安/散布地	大字是川	太陽光発電設備設置	24.00㎡	平成 30 年 8 月 21 日
24	酒美平遺跡(19 地点)	縄文・飛鳥・奈良・平安/集落跡	大字田面木	福祉施設建築	93.00㎡	平成 30 年 8 月 23・24 日
25	笹ノ沢(2)遺跡	縄文/集落跡	大字尻内	新産業団地開発	730.50㎡	平成 30 年 9 月 5 日 ～10 月 31 日
26	榊引遺跡(9 地点)	縄文・奈良・平安・集落跡・城館跡 中世・ 近世/集落跡・城館跡	大字榊引	太陽光発電設備設置	550.00㎡	平成 30 年 8 月 7～9 日、 9 月 18 日～10 月 5 日
27	八戸城跡③	縄文・弥生・古墳・近世・近代 /城館跡	内丸	個人住宅建築	1.40㎡	平成 30 年 9 月 20 日
28	八戸城跡④	縄文・弥生・古墳・近世・近代 /城館跡	内丸	個人住宅建築	12.00㎡	平成 30 年 9 月 25 日
29	雷遺跡②	縄文・平安/散布地	大字田向	長芋作付け	394.00㎡	平成 30 年 10 月 9～15 日
30	市子林遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世 /集落跡	大字妙	個人住宅建築	3.50㎡	平成 30 年 10 月 15 日
31	松ヶ崎遺跡隣接地	縄文・奈良・平安/集落跡・貝塚	大字十日市	範囲確認	12.00㎡	平成 30 年 10 月 16 日
32	酒美平遺跡②	縄文・飛鳥・奈良・平安/集落跡	大字田面木	太陽光発電設備設置	19.00㎡	平成 30 年 10 月 17 日
33	石橋遺跡	平安/集落跡	大字新井田	福祉施設建築	54.00㎡	平成 30 年 10 月 22・23 日
34	石橋遺跡(12 地点)	平安/集落跡	大字新井田	長芋作付け	582.50㎡	平成 30 年 10 月 22 ～31 日
確認調査	35 新田城跡(館平遺跡)	縄文・平安・中世/集落跡・城館跡	大字新井田	内容確認調査	630.00㎡	平成 30 年 7 月 23 日 ～8 月 29 日
本発掘調査	36 榊引遺跡(6 地点)	縄文・奈良・平安・集落跡・城館跡 中世・ 近世/集落跡・城館跡	大字榊引	寺院建築	180.00㎡	平成 30 年 4 月 4～27 日
	37 雷遺跡第(5 地点)	縄文・平安/散布地	大字田向	長芋作付け	1,000.00㎡	平成 30 年 5 月 8 日 ～7 月 2 日
	38 雷遺跡(6 地点)	縄文・平安/散布地	大字新井田	個人住宅建築	20.00㎡	平成 30 年 4 月 3～5 日
	39 石橋遺跡(11 地点)	平安・近世/集落跡・墓地	大字新井田	長芋作付け	870.00㎡	平成 30 年 5 月 9～31 日
	40 雷遺跡(4 地点)	縄文・平安/散布地	大字中居林	集合住宅建築	650.00㎡	平成 30 年 7 月 6 日～ 8 月 3 日
	41 八戸城跡(40 地点)	縄文・弥生・古墳・近世・近代 /城館跡	内丸	店舗建築	調査中	平成 30 年 10 月 9 日～
	42 八戸城跡(41 地点)	縄文・弥生・古墳・近世・近代 /城館跡	内丸	交番移転築	130.00㎡	平成 30 年 9 月 3～28 日

報告遺跡

※ 10 月末日現在



平成 30 年度発掘調査遺跡位置図

1. 遺跡の概要

本遺跡は、市の中心部から南東に2.4kmの地点に位置し、標高15～30mの段丘上に立地します。八戸市教育委員会では、平成25年度から毎年試掘調査および本発掘調査を行ってきました。特に平成28年から調査の件数が急増し、それにあわせて遺跡の全体像が少しずつ明らかになってきています。

今年度は3箇所の本発掘調査（4・5・6地点）と2箇所の試掘調査を行いました。ここでは、特に多くの成果があがった5地点の調査成果を中心に紹介します。

5地点は遺跡のほぼ東端に位置し、標高17.5～21.5mの北から南へ傾斜する緩やかな斜面に立地します。平成29年度から継続して調査を行っており、今年度は5月8日から6月27日まで、約1,000㎡を調査しました。

2. 検出遺構

平成29・30年度の調査で検出した遺構は、竪穴建物跡14棟、土坑21基（うち土坑墓4基）、溝跡7条、井戸跡6基、溝状土坑18基、性格不明遺構2基、そのほか柱穴を含むとみられる多数のピット群です。また、ピット群の並びを検討した結果、掘立柱建物跡^{ほったてぼしらたてもの}21棟、柵列2条を復元することができました。

溝状土坑は、長さ3.5～4mの細長い楕円形の穴です。縄文時代につくられた狩猟のための落とし穴と考えられています。北から南へ向かう傾斜に平行するように配置されています。

竪穴建物跡14棟のうち、出土遺物や遺構の形から、3棟が飛鳥～奈良時代（SI5・17・18）、3棟が平安時代（SI13・14・15）、3棟が江戸時代（SI6・9・10）であるとみられます。

本地点の南側では、深さが50～60cmに達すると湧水し始め、低い場所ほど湧水が顕著になります。それに対し、標高約20mより高い位置では、土を深く掘っても湧水しません。

飛鳥～奈良・平安時代の竪穴建物跡は、標高20mより高い位置に立地しており、湧水する場所を避けて建物をつくっていたとみられます。これに対し、江戸時代の竪穴建物跡・掘立柱建物跡は、あえて湧水しやすい南側の地点につくられており、高い場所に位置するのはお墓のみです。地盤が弱く、湿気が多い場所にあえて集落を営む利点、あるいは社会的制約があったのか、今後の課題となります。

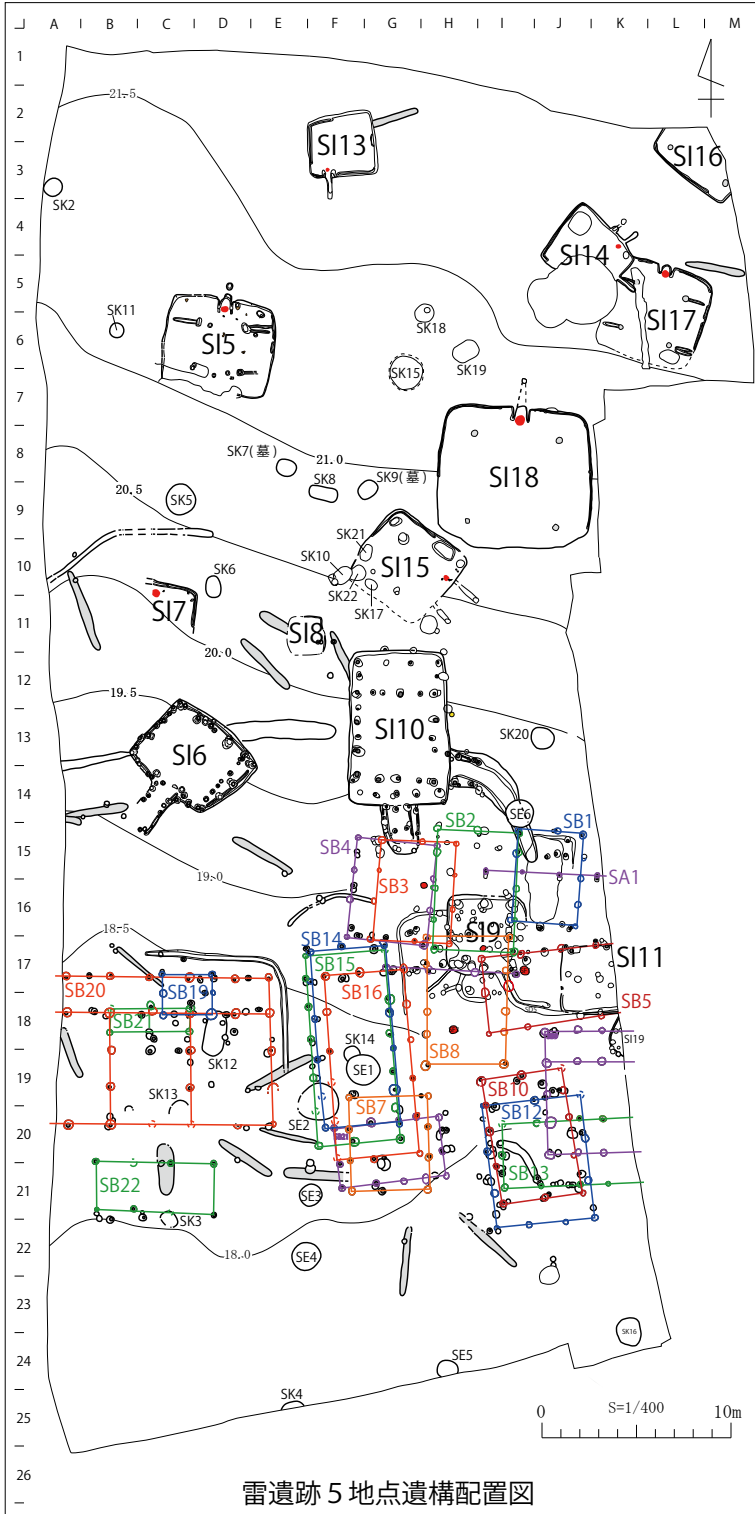
3. 出土遺物

縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器、土製品、石器、鉄製品、銭貨、木製品が出土しました。

注目される遺物として、SI13竪穴建物跡の床面から、小さいお皿のような形をした木製品が出土しました。木製品などの有機物は通常、水漬けの状態など特殊な環境に置かれていた場合にしか残りません。本遺物は全体が真っ黒に炭化していたため、腐らず残ったものとみられます。

4. まとめ

今年度は5地点のほか、遺跡の西端にあたる4地点と、そこから東に約10mに位置する6地点を本発掘調査しました。4・6地点からは飛鳥～奈良時代の竪穴建物跡がみつっていますが、平安時代や江戸時代の遺構は検出されていません。このことから本遺跡に住んでいた人びとは、飛鳥～奈良時代には遺跡全体を集落域として利用し、平安時代になると遺跡の東側の比較的限られた範囲に居住するようになったことが考えられます。まだ遺跡の中央に未調査の部分が多いため推測の域を出ませんが、今後の調査により検証していきたいと思えます。（横山寛剛）



- SB: 掘立柱建物跡
- SA: 柵列
- SI: 竪穴建物跡
- SK: 土坑
- SE: 井戸
- SD: 溝跡
- 溝状土坑



調査区南側のピット群 (南から撮影)



調査区北側の竪穴建物跡 (南から撮影)



SI18 から出土した炭化材 (南から撮影)



SI13 から出土した木製品



SI10 竪穴建物跡 (南から撮影)



SI10Pit4 底面から出土した柱

1. 遺跡の概要

本遺跡は、八戸市庁から南西へ約 6km の館地区に位置し、馬淵川右岸の標高 20 ～ 110m の段丘上に立地します。その範囲は東西 0.6km、南北 1.4km と広大で、これまでの発掘調査から、縄文時代草創期、奈良・平安時代、そして江戸時代といった様々な時代の人びとが暮らしていたことがわかっています。そのうち、中世の南部氏よりつながる櫛引氏の居館があった範囲は櫛引城跡と呼ばれています。

今回報告するのは、明治小学校から約 500m 南、馬淵川から約 200 m 離れた標高 17m 程度の常安寺敷地内で、平成 28・30 年度の 2 回に分けて行われた発掘調査です。発掘調査では、縄文時代や奈良・平安時代の遺構・遺物もみつっていますが、今回は特に成果が大きかった江戸時代について主に報告します。

2. 検出した主な遺構

調査した地点の地形は、南側の第 5 地点が高低差 1m 程度の北から南に下る斜面で、北側の第 6 地点はさらに標高が高く平坦になっています。第 6 地点では、第 5 地点より古い時代の地層が露出しており、人為的に地形を削平していたことがわかります。

南側の標高 16m 程度のところでは井戸跡を 3 基検出し、掘り下げたところ、それぞれ標高 15m 前後で湧水を確認しました。北側の標高 17m 程度の比較的高いところでは竪穴建物跡 1 棟・掘立柱建物跡 8 棟を検出しました。井戸は水が湧きやすい低いところにつくられ、一方で人びとが作業や寝食をしていた建物は、水が湧きづらい高い部分につくられた傾向がみてとれます。

掘立柱建物跡は最も多くみつかった遺構で、現在の建物と同じように平地につくられています。現在の建物と異なるのは、地面に掘った穴に柱をさして立てる建築方法です。この建築方法は全国的に縄文時代からみられますが、北東北では江戸時代まで人びとが生活する建物にみられます。これまでの発掘調査成果から八戸における江戸時代の掘立柱建物は、柱と柱の長さ（柱間寸法）が江戸時代の前半と後半で変わる傾向があるといわれており、今回みつかった建物の柱間寸法は、少し長いもので江戸時代前半までに多い種類のものでした。

また、明治以降とみられる石敷遺構は、建物を支える基礎の一部とみられ、この場所につくられる建物が新しい時代になって、石の上に柱を立てる礎石立ちに変わったこともわかりました。

3. 出土遺物

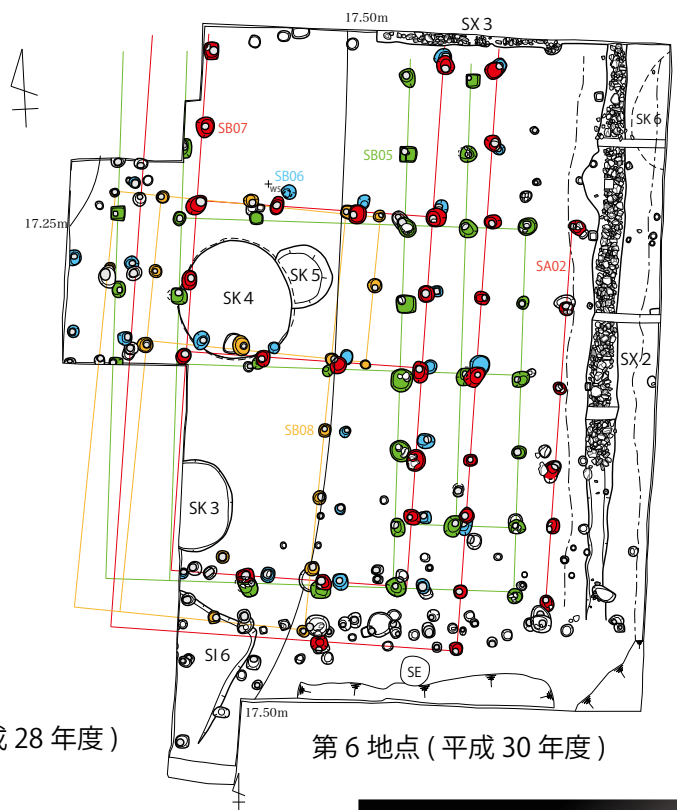
井戸跡や建物跡からは、中国産の皿や国内産の碗・皿・搦鉢・壺・香炉など様々な種類の陶磁器がみつかりました。これらの陶磁器は、ほとんどが江戸時代に使われたものであり、その時期は江戸時代の初めと中ごろの大きく 2 つに分けられます。

また、掘立柱建物跡の柱穴から鉄釘が出土しています。鉄釘は形やつくり方に大きな変化がないため、具体的に時期を特定できませんが、建物の建築に使用された可能性が高いとみられます。

4. まとめ

今回の調査でみつかった建物跡は、江戸時代の初めと中ごろに営まれたものと考えられます。江戸時代初めの資料は県内でも少ないため、今回の櫛引遺跡における発掘調査は貴重な事例となりました。

さらに、現在の常安寺と、文献資料上の始まりが江戸時代の開始前後とされる「常安寺」とが、つながっている可能性を高くする新たな資料ともなりました。（苧坪 祐樹）

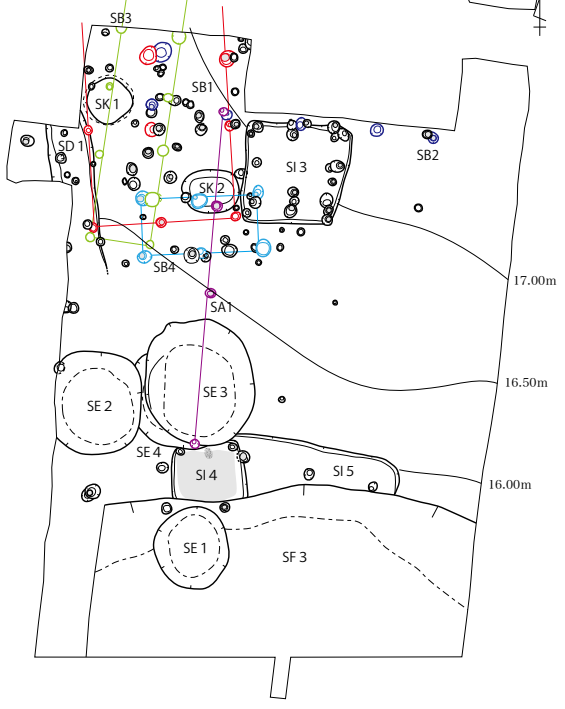


- SB: 掘立柱建物跡
- SA: 柵列
- SI: 竪穴建物跡
- SK: 土坑
- SE: 井戸
- SD: 溝跡

0 S=1/200 4m

第5地点(平成28年度)

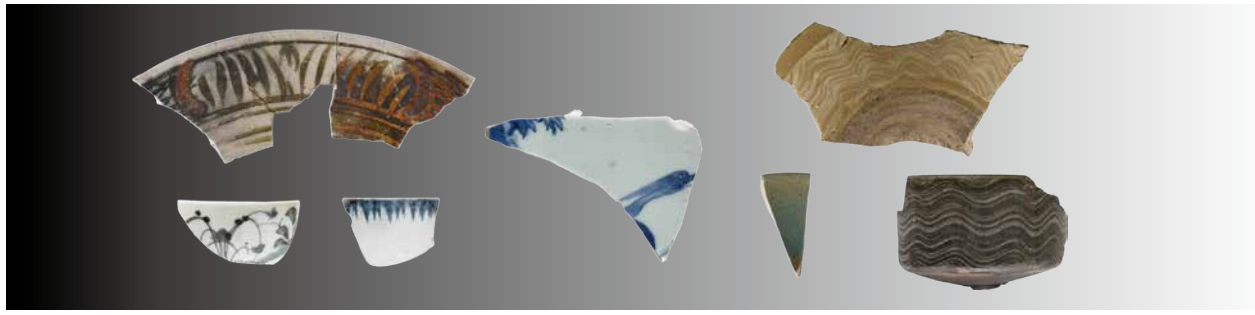
第6地点(平成30年度)



発掘調査地点遺構配置図



江戸時代初めの陶磁器



江戸時代中頃の陶磁器

1. 遺跡の概要

新田城跡（館平遺跡）は、八戸市中心部から南東約 3.5km に位置します。新井田川と松館川との合流点の右岸にある標高 6～37m の独立した段丘上に立地し、その最も高く平らなところに新田城跡があります。

お城の中心部である本丸（主曲輪）は、東西約 200m、南北約 150m の広さがあり、根城南部氏の一族である新田氏の居城と伝えられています。お城がつくられた時期は、遅くとも明徳 4（1393）年以降と推測されていますが、正確な時期はわかっていません。天正 20（1592）年に、根城とともに破却され、城としての機能を失ったとされています。寛永 4（1627）年、根城南部氏が遠野へ国替えとなったときに、新田氏も遠野へ移り、新田城は廃城になったと考えられています。廃城後も土地は利用され、明和 3（1766）年には、当時の八戸藩主が隠居後の病氣保養のために、建物を建てて移り住み、これを「新井田御殿」と呼んだという記録が文献に残っています。

新田城跡は、調査事例が少なく、お城の内容はよくわかっていません。今年度から 3 年間の計画で、お城の内容を確認するために本丸部分の調査を行う予定です。今年度の調査は、本丸部分約 15,000 m²のうち、約 5,000 m²を対象に調査を行いました。

2. 検出遺構

今回の調査では、主に戦国時代から江戸時代と考えられる掘立柱建物跡群・倉庫跡・井戸跡・土坑・鍛冶遺構・塀跡・土塁、縄文時代の竪穴建物跡・土坑・落とし穴などがみつかっています。また、土地を平らに整えたるための整地がされていることがわかりました。

調査区北西部では、たくさんの柱の穴が重複してみつかったことから、掘立柱建物跡が複数回にわたって建て替えられていると考えられます。調査区南東部では、1つの穴のなかに同時に 2本の柱を建てた棟持柱をもつ倉庫跡がみつかりました。このような建物跡は、現時点では類例が見当たらないため、今後、建物の構造を検討する必要があります。

今回みつかった戦国時代から江戸時代とみられるさまざまな遺構から、本丸内部での居住・生産・保管（備蓄）など空間利用のあり方がわかってきました。

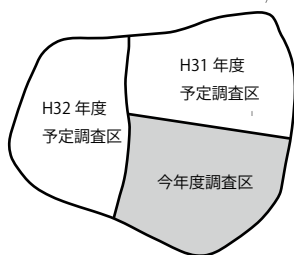
3. 出土遺物

今回の調査では、縄文土器・土師器・陶磁器・石器・鉄製品・土製品・銭貨などが出土しました。新田城の存続時期を考える手がかりとなる陶磁器は、戦国時代から江戸時代の国産陶磁器、江戸時代の中国産磁器など、幅広い時期のものがああります。過去の調査でも、戦国時代頃の陶磁器が出土していることから、この時期に城内で人びとが暮らしていたことは確かです。

4. まとめ

今回の調査は、お城の内容を確認するための調査であるため、遺構がみつかったとしても掘り下げるのは最小限にとどめました。そのため、各遺構の詳細な時期を知るには限界があります。しかし、遺構の形とそのあり方や、少量ながらも、縄文土器や、戦国時代から江戸時代の陶磁器などがみつかっており、この時期に人びとが活動していたことがわかりました。

今回の調査で様々な遺構がみつかり、少しずつお城の姿がみえてきました。今年度の調査から得られた情報を検討し、来年度以降の調査につなげていきたいと考えています。（田中 美穂）



遺構配置図

本丸部分調査予定図



新田城跡本丸全景（東から）



倉庫跡（北から）

【特別報告】 さんのへじょうあと 三戸城跡（三戸町）

1. 遺跡の概要

三戸城跡は三戸市街地の中心に位置します。当城跡及び遺跡の西側には熊原川、北東には馬淵川が流れており、当地は両河川の浸食により形成された河岸段丘です。標高は、城跡の最も低い裾部分で約 35 m、最も高い本丸の位置で約 131 mを測り、周囲から独立した丘陵となります。三戸城跡は伝承によると、三戸南部氏の居城として造営されたところといわれております。城跡内には、平地造成された曲輪や土塁・堀・石垣といった遺構が残り、また、城内の空間的特徴から中央集権的な構造を持つ城跡と考えられます。

2. 検出遺構

平成 29・30 年度の発掘調査は、城跡内で保存状況が良好と考えられた「おおごもん大御門跡」で実施しました。

調査の結果、同地区から石垣のすみいし角石・つきいし築石、土塁、門礎石、石列が検出されました。

【①石垣】角石のうち出角部分は方形に面取り加工された花崗岩の切石で構成され、入角部分は加工の痕跡がない安山岩で構成されています。また、角石と角石の間の築石はいずれも加工を伴わない安山岩で構成されています。安山岩は輝石を含むことから名久井岳産と思われ、花崗岩については一戸町の茂谷山産のものと思われま。

【②土塁】土塁は主に黒土を使用して築かれていたことが判明しています。土塁の基底部分（芯の部分）から確認できる立ち上がりラインは勾配が約 68 度、土塁の幅は約 6 m 60 cm、西土塁の高さは残存部分で約 2 m 50 cm、東土塁は残存部分で約 3 m 50 cmを測ります。

なお、両土塁のノリ裾には粘土や砂が堆積しており、これらは、土塁の上端を構成するものであったと考えられます。また、土塁は多重の層に分かれており、数十cm単位で硬化した面があることから、数回に分けて突き固めをして構築したと考えられます。

【③門礎石】西土塁と東土塁に挟まれた通路の南側から、直径約 90 ～ 140 cmの火成岩で構成された大礫が 7 個検出されました。これらの大礫は一定のレベルで規則的に配置されていることから、門柱を支えた門礎石であると特定されました。

検出された門礎石配置の規模は、最大幅が約 9.5 m、奥行きは約 5 mとなります。なお、調査区には部分的に攪乱を受けた痕が確認されており、門礎石の本来の数は 8 個以上で構成されていたと考えられます。門礎石が足りない理由としては、後世の人が門礎石を何かに転用する際に抜き取ったためと思われま。

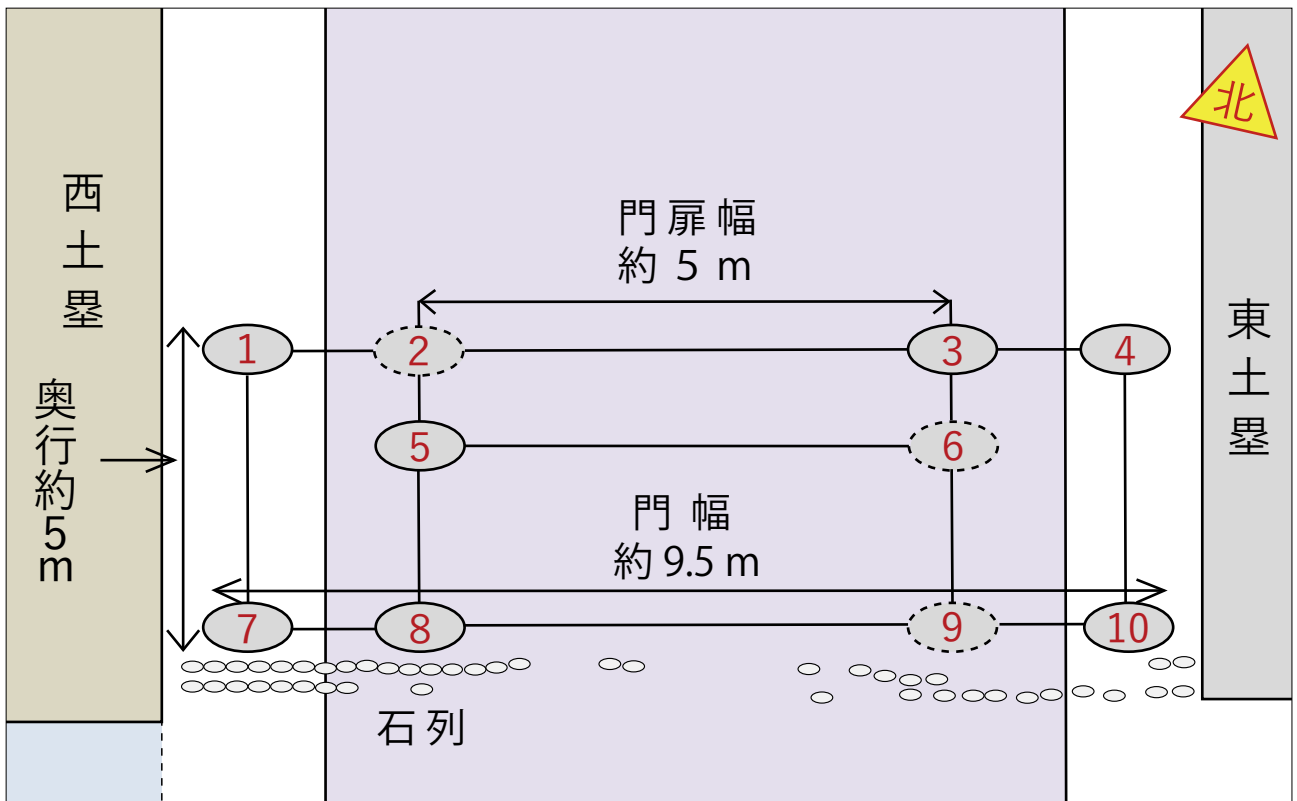
3. 出土遺物

調査区内から、しのやき志野焼の碗の破片・平瓦の破片・丸瓦の破片・鉄製の釘・古銭が出土しました。瓦片はいずれも無釉で、丸瓦の内面にあるコビキ痕の特徴から古式（17 世紀初頭）のものであると考えられています。

4. まとめ

調査の結果、大御門跡は絵図で記されたとおおり、土塁を伴った通路とその片側には石垣を構築し、門は礎石立ちであったということが判明しました。門跡の年代については、角石の加工痕および瓦片の分析から 17 世紀初頭までには造られたと推定されます。（野田 尚志）

門礎石配置図



門礎石近景



第 17 回 八戸市遺跡調査報告会次第

- 13 : 00 出土品展示室開場
13 : 30 報告会受付開始
14 : 00 開会挨拶
14 : 05 平成 30 年度調査概要
14 : 15 調査成果報告 雷遺跡
14 : 35 調査成果報告 櫛引遺跡
14 : 55 10 分休憩
15 : 05 調査成果報告 新田城跡
15 : 25 【特別報告】 三戸城跡
15 : 45 質疑応答
16 : 00 閉会挨拶
閉場 (出土品展示室は 16 : 30 まで)

